大阪商業大学学術情報リポジトリ

国際交易と表音文字（アルファベット）の関係性 ー地中海交易（紀元前2000～1000年）を事例とした仮説ー

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2022-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷岡, 一郎, TANIOKA, Ichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1148

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

国際交易と表音文字（アルファベット）の関係性
―地中海交易（紀元前2000～1000年）を事例とした仮説―

谷　岡　一　郎

原始社会における文字
社会の誕生
地中海交易
フェニキア人 ―「商人の精神」のスタート―
表音文字の発達
表音文字の系統

原始社会における文字

人類が2足歩行を始め、そのおかげもあって脳の容量が増え、洞穴などを拠点として数家族単位で行動していた数百万年もむかしの頃であろう。メンバーの誰かが（証拠はほとんどないが）「数を記録しはじめた」はずである。最初は岩や骨などに一定間隔でキズのようなものをつけ、せいぜい10くらいまでの数を認識したのであろうか。

手の指が5本ずつであるため両手で10になる。おそらく10進法は、どの原始社会でも独立して発展したことだろう。まれに足の指まで含めた20進法や、分割しやすい12や60を基準とする数字の体系が使用された集落もあったが、多くの社会では10進法が使われたと考えられている。

本稿は、「貿易が発展するプロセスにおいて、文字が大きく関与する」ことを示すつもりであるが、今回は使用する具体事例として、紀元前2000年頃に多国間交易がスタートした地中海に限定する。具体事例から始める方が理解が早いからである。交易と文字、どちらかと言えば前者が早いと考えられるにせよ、「ほぼ同時に影響しあい、発展したものと考えて差しつかえない」ことを本文中で示すつもりである。仮説として記述するなら、（特に地中海において）「文字は交易上の必要性により発展した」となる。地域・年代限定の事例を安易に一般化するべきでないことは、そのとおりであるが、過去におけるこの観点でのこのトピックへの言及は、筆者の知る範囲にはない。しかしその前にまず、地中海の交易が本格的にスタートする以前の、「時代背景」と「文字の実態」を少し説明しておくことからスタートしたい。

月のサイクル

具体的証拠は何もないが、「数える」ことは、文字や絵によって何かの意味を表現するよりも早かった可能性が高い。それはグループが冬を越せるか否かを計算する ―おぼろげに把握する― には、そのグループの人数と、木の実やきのこ、果実、具や海藻など各食料の数、そして冬の長さの概念が必要だったからだ。

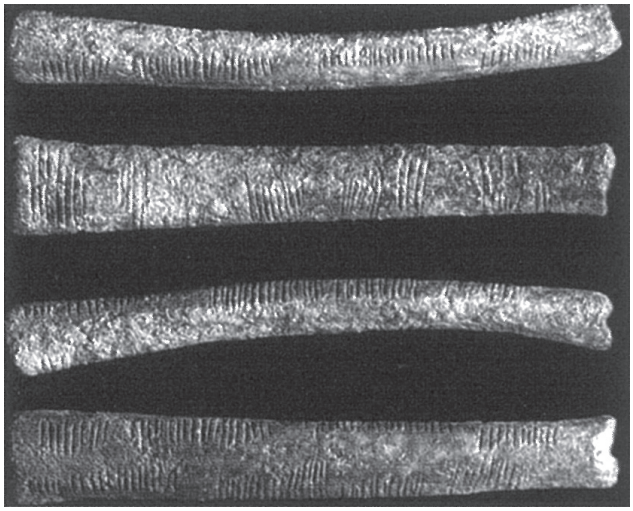
経験により、食料のほとんど取れない時期が「月の満ち欠けが2回くり返す」期間あるとしよう（実際そんなものだろう）。すると、少なくとも60日はしのげる食料が要ることになる。

おそらくそれまでの経験により、1年という周期は、月が12回くらい満ち欠けする期間だと知っていただろう。もしそれすら知らなかったならば、そのグループが生き残っていた可能性は小さい。そして月のサイクルが約30日だというのは、くり返し観察することでだいたいわかる。次図表はコンゴのイシャンゴ洞穴で発見された動物の骨を刻んだものだが、およそ3～2万年前のものだと紹介されている。おそらく「月のサイクルを記録したもの」とする説が有力である（が異論もある）。

月のサイクルは潮の満ち引きにも関係するため、貝や海藻を獲ったり、漁に出るには必要不可欠の知識である。また月の明るい期間は、夜の作業や遠征が可能になるなど、当時の生活サイクルには欠かせないものだったと考えられる。

財産目録

「絵文字」と呼ばれる表意記号の一種が作られたのは、おそらく紀元前4000年期の中期ごろ（BC3500年前後）より後のことと考えられている。メソポタミアやエジプトから、古い「財産目録」らしき粘土板が出土しているが、メソポタミアではBC3200年頃、エジプトではBC3400年頃のものが、これまで知られている（文字が書かれたものでは）最も古いものである。

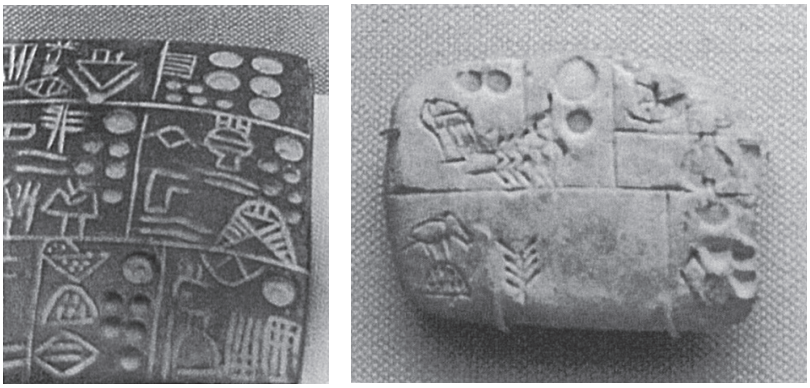


図表①　Priya Hemenway, “THE SECRET CODE”, Evergreen, 2008.

メソポタミア出土のものは、ここに見られるように、俗にそう呼ばれているところの「楔形文字」の祖先にあたる。絵によって牛や奴隷などの「意味を記号化」し、そのあとに数を示す記号が入っているため、たぶん財産目録だと考えられている。

実を言えば、絵文字がなく、「数値だけを示す財産目録」は、より古い時代から存在しており、それが「通常の絵文字よりも数字と計算システムが先だった」と考えるひとつの論拠（補強証拠）でもある。

数値だけを示す財産目録とは、「ブッラ」と呼ばれる中が空白になった粘土状の乾燥した泥玉で、中に数（そして物）を表す別の粘土小片を封印することで示される。おそらく約束（契約）した数 ―たとえば「嫁に持たせる持参金として羊を10頭」とか… ― を示すために同じものを2個作り、約束した双方が保持していたものと考えられる。図表右は、メソアメリカ（ペルー）で使用されていたヒモと結び目を利用した数字表示システム。時代は異なる



図表②

メトロポリタン博物館（筆者による写真）

テルモ・ビエバニ／バレリー・ゼトゥン
『人類史マップ』、2021より

国立民族学博物館所蔵
ペルーのヒモによる技術

図表③

『人類史マップ』テルモ・ビエバニ／バレリー・ゼトゥン　日経ナショナルジオグラフィック社　2021年

が、数字体系は公的記録になくてはならないものだった。

逆から考えるなら、こうした約束 ―商取引における契約の元になった？― は、けっこう古くから慣例となっていたはずで、ペルシア（スーサ）では、約BC5000年頃のブッラが見つかっているほどであるが、その頃にはまだ絵文字は見つかっていない。

意味を表す絵文字と数字が使用され始めたのは、こうして財産の記録をとるためだったと考えられる。なぜそのようなものが必要だったのか。それは集団の規模が大きくなり、定住化が進み、そして社会化が進んだからであろう。

社会の誕生

社会ができあがる過程のほとんどは、「100人以下で食料の獲れる拠点を移動し続ける」ような、原始の集団形態から始まっている。それが進化すると、いつしか農業をスタートし、1,000人以上の規模で定住を始め、集落、村、あるいは小規模の「社会」と呼んでもよいレベルになる。このくらいの規模になると、少数のリーダーだけでは秩序が維持できなくなってしまう可能性が高い。そして今までは不要だったものが必要となってくるのである。

必要条件 ―文字―

社会と呼べる生活共同体レベルに、新たに必要となるのは、「規則（法）」、「役割分担（仕事／職）」、そしてリーダーシップを司る「行政府のような集団と、そのヒエラルキー」である。おそらく神官のような、祭礼・儀式や集団行動などを決める宗教団体も生まれ、そのヒエラルキーに組み込まれただろう。

しかしその前提条件で必要不可欠なのが、「文字」およびそれによる「記録」である。収税の前提として戸籍が作られ、収穫や財産を記録していなければ、必要な行政サービスなどはそもそも不可能である。

当初は「表意文字」による目録（図表②参照のこと）で十分だったかもしれないが、そのうちに「表音文字」―すなわちアルファベットのように発音を表す文字―が必要となるだろう。集団が大きくなれば、「×××村の△○△さん」といった戸籍の確定ができなくなるからである。

暦と共同作業

もうひとつ、文字にも関係しているのだが、忘れてならない重要な要素がある。それは共通の暦、つまり今でいうカレンダーが必要条件だという点である。

各社会が独自のカレンダーを持っていたのは間違いない。しかもそのカレンダーは、以前に述べた生活サイクルにより、ほぼすべてが月齢によるカレンダー ―ルナ・カレンダー― であっただろう。

どの社会でも、月齢に加えて「1年間」という感覚も併用していたはずである。以前にも言及したが、常夏の地域を除いて、月が12回満ち欠けする期間で、暑くなったり寒くなったりすることに気づくのが自然である。特定のシーズンには、ある種の果実が収穫されたり、特定の魚が群れでやってきたりと、一年のサイクルが経験としてあり、作業もそれに従って決められただろう。

12ヶ月だけだと354日程度しかなく、シーズンがズレ始めることはすぐに判る。適当に ―3年に1回程度―「うるう月」を挿入してアジャストするのも、多くの社会で行われていた慣例であることが判明している。

共同作業 ―たとえば種撒きや刈り入れなどの農作業― の日を決めるには、カレンダーがなくてはならないことはすぐわかる。多くの社会では「次の新月から△日め」などと、新月から計算した布告が出たはずであるが、新月の日は共通の認識として同じ日でなければならない。ピラミッドや宮殿のような巨大土木作業のケースでは、特定の村に対し、たとえば「新月から3日めと4日めに男子100人」などと、作業割当てが届いたはずであり、その前提として、戸籍がきちんと作られており、しかも一家の人数をはじめ年齢まで記されていただろうと推定される。

当時の社会で字が読める人は限られていた。ましてや書くことができる人間はまれで、「書記」という職業は行政府や神殿の中でも、比較的栄誉ある地位だったと考えられる。各村には、少なくとも布告を読んで皆に伝える村長か、その補助のような存在が必要だっただろう。でないと、共同作業など元来不可能だったからである。

地中海交易

さて、本題に入っていくことにしよう。紀元前2000年期、つまり紀元前2000年～1000年までの地中海社会における交易 ―特に海上国際交易― の話である。

エジプトやメソポタミアの文明は、紀元前3000年期中にはかなり発展・充実していたため、紀元前2000年期には、もうすでに文明と呼べる規模と内容の社会が、各地に点在していたものと考えてよい。地中海地域でも、メソポタミアにほど近い西アジア沿岸 ―つまり地中海の東の端― やアフリカ大陸の北東地方（エジプト）を中心に、船による貿易・交易（以下「交易」に統一しておく）は始まっていたと考えてよいのである。今で言うエーゲ海を中心とする島々を拠点とした交易である。この時代は国と国との公的な交易（二国間貿易）が中心だったと考えてよい（次ページ、図表④参照のこと）。

エーゲ海文明

地図に示されたとおり、地中海の東側の要の位置に「クレタ島」がある。地中海交易の最初の主人公は、このクレタ島を中心とした「エーゲ海文明」である。エーゲ海文明には、クレタ島を中心とするものの他に、同程度に古いと考えられる「キクラデス諸島を中心とする文明」も含まれる。

クレタ島を本拠地とする文明は、特に「ミノア文明」とも呼ばれているが、これはのちにギリシア側でそう名付けただけのことである。このミノア人がどこから来た民族かは議論が分かれ、まだ判然としていない。

クレタ島を中心とするエーゲ海交易が始まるのは、紀元前2100年頃のことであるが、以後紀元前1650年頃までを、考古学者アーサー・エヴァンズの呼称により「第一宮殿時代」と呼ぶ。この頃は、メソポタミアやエジプトの文明が始まって1000年以上経つにも拘らず、クレタ（ミノア）人ほど航海術を駆使する集団はほとんど出現していない。海を（本当の意味の）拠

点とする文明は、このクレタ島の人々（以下「クレタ人」と呼ぶ）に始まるとすら言える（と言っているのは著者ではなく、『海から見た世界史』の著者、シリル・P・クタンセ[1)]である）。

アフガニスタンのラピスラズリ、スーダン（クシュ王国）の金や象牙、エジプトのアラバスターといった産出物をはじめ、小麦や油など農産物の「交易用ハブ港」となることで、クノックスを中心とするクレタ島は巨万の富を手に入れる（前出クタンセ、2016より）。他の興亡をくり返した地域（文明）と事情を異にした点は、航海術（つまり軍事面の優位）を独占していたため、他国からの侵略が（当時は）ほぼ不可能であった点と、船によるより広範囲の交易が可能であった点だろう。ハブ港以外の拠点も各地にあり、それらを結ぶネットワークができていた。そして二国間貿易のみならず、この頃から多国間貿易に変化していったと考えられる。

ただしもうひとつ、クレタ人たちが力を入れた文化があり、それは結果的にクレタ島の発展に大きな力となったのであるが、それは海の安全を（海賊などから）守り、契約を守ることに加えて、「他人の取引の仲介役も引き受けた」ことである。軍事的に秀でていたという事実は、契約の強制力を持ち、罰則を科す力をも持っていたことと同義なのだ。これはのちのフェニキア人にも受け継がれてゆく重要なポイントとして、覚えておいてもらいたい。

図表④　BC2000年紀の地図（海岸線、河川などは推定も含む）

（シリル・P・クタンセ、2016、P.27に谷岡が手を加えたもの）

1）シリル・P・クタンセ『海から見た世界史 ―海洋国家の地政学―』原書房、2016.

線状文字

20世紀初頭にクノッソス宮殿をはじめ、クレタ島各地を発掘したアーサー・エヴァンズは、遺跡から線状文字の書かれた粘土板を数多く発見している。それらの文字群は少なくとも３種類あり、便宜上「クレタ絵文字（A、B）」と「線文字A」と名付けられた。線文字Aは、のちによく似た「線文字B」がギリシア本土で発見され、そちらの方はギリシア語との共通点によりすでに解読された。しかしおそらくエトルリア語を元にしている線文字Aは、単語や数詞レベルでしか解読されていない。

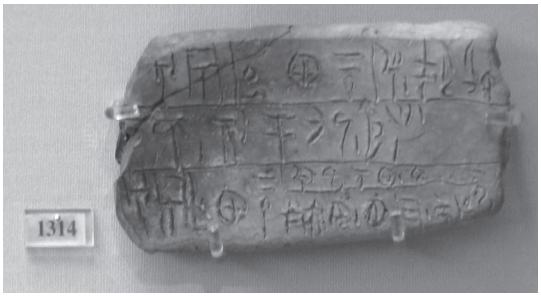
多国間貿易の時代には、契約を遵守したり仲介したりする前提として、「共通の文字によるメモ」のようなものが必要であることはすでに述べた。クレタ絵文字（A、B）は、どちらも絵に近いものであったが、線文字Aはもう少し洗練されていた。いや本稿の仮説から逆に辿るなら、交易の範囲が広がり、いろいろな国や民族が関与していくにつれ、「単なる絵文字では不十分で、より洗練された文字が必要になった」のだと考える方が自然であろう。

「洗練された文字」と言っても、この時代の海上交易においては、（のちのホメロスに見られるような）美しい詩的文章などはまだ必要ではない。限定された物品名、数量、そして納期などの条件を示す方法さえ表示できるなら、十分に間に合う時代だったと考えてよい。

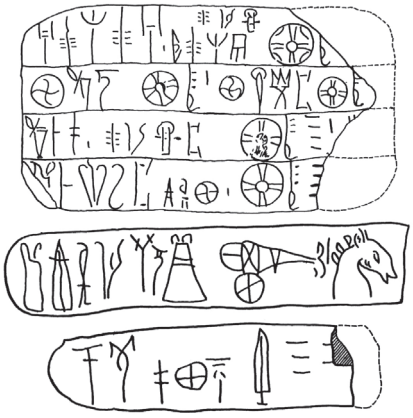
ミュケナイ文明と「海の民」

クレタ島の「第３宮殿時代（BC1450-1200頃）」になると、クレタ人たちの航海術や、船の建造技術をマスターする民族が出現し始める。ギリシア本土ペロポネソス半島のミュケナイ人、アナトリア（現トルコ）のヒッタイト人、レヴァント地方（レバノン、シリア、イスラエルあたり）のカナン人たちであるが、特にミュケナイ人はクレタ人たちの海上権益を脅かし、最終的には取って代わることになる。

クレタ文明が衰退した一番の理由は、噴火や地震（＋津波）などの自然災害だったと考え



アテネ考古学博物館（筆者写真）：線文字A



クノッソス出土の線文字B粘土板
世界の文字の図典（2009）より

図表⑤

『世界の文字の図典　普及版　世界の文字研究会編　吉川弘文館　2009年.

られているが、いずれにせよクレタ人の多くはギリシア本土方面に逃げ、そこに拠点を移したりもしている。こうしてミュケナイ文明は、ミノア文明の商業網を手に入れ、大きく繁栄できたのであるが、残念なことに紀元前11世紀に入る頃までしか続けることができなかった。紀元前1200年前後に興った「海の民」が原因だったと伝えられる。

「海の民」と呼ばれる人々は、「エジプト、ヒッタイト、ギリシア（ミュケナイ文明）、その他レヴァント地方の国々などを滅ぼした」と伝えられている民族である（エジプトに残る石碑やメソポタミアの文書などによる）。あまり文献のない時代でもあり、実体はよくわかっていない。海の民がどこから来て、そもそもの出身はどこか、ということすら判明していないのである。

この時代の地中海地域の歴史に詳しいエリック・H・クライン[2)]によると、海の民の侵略とは、様々な要因が複雑に絡み合った、ドミノ倒し的な文明崩壊プロセスだったのではないかと考えているようだ。かりに実際に海の民なるものが存在したとしても、最終的にトドメをさした「小規模のグループによる略奪が記録されたのだ」と考えているが、仮説にすぎずむろん反論も少なからずある。

海の民の実体が何であれ、地中海東部を囲む地域において、ほぼ時を同じくして各地で文明の崩壊が起こったのは事実であり、クレタ文明そして後継のミュケナイ文明もまた滅亡してしまった。ここにおいて、地中海交易という商業上の大きな利権は、ほぼ空白状態となってしまったのである。

その空白に登場するのが「フェニキア人」である。

フェニキア人 ―「商人の精神」のスタート―

ミュケナイ人たちが地中海から姿を消した時、つまりBC12世紀半ば頃、地中海の交易に乗り出したのはカナン地方を拠点としていた人々で、のちにフェニキア人と呼ばれる人々だった。フェニキア人は、地中海東端の沿岸（レヴァント地方）を拠点とし、クレタ島を中心とするネットワークの一部でもあった。クレタ人たちの築いたノウハウが蓄積できていたがゆえ、海の交易にはうってつけの人々だったのである。

「フェニキア人」という名称は、のちのギリシアでそう呼ばれたというだけのことで、実は本人たちがそう名乗っていたわけではない。最初はビュブロスやシドン、テュルスといった、「レヴァント地方の港を中心としていたカナン人たち」だったと考えられているが、そもそも海が拠点のようなもので、リーダーもバラバラの小集団がいたりと、一応テュルスが機能的に首都であったとしても、正式な首都だったというわけではない。ただしBC9世紀頃、テュルスを拠点とするフェニキア人がイタリアの錫や、スペインの銀などの貿易の寄航地として開発した、アフリカの「カルタゴ」（今のチュニスあたり）は、国名および首都として正式なものである。

2）エリック・H・クライン『B.C.1177古代グローバル文明の崩壊』筑摩書房、2018.

商人道と決定レジティマシィ・システムの開発

フェニキア人はクレタ人たちの航海術や船をより改善・発展させ、より広範囲の交易を一手に引き受け、かつてのクレタ人をしのぐとも言われる巨大な富を築き上げた。この地中海における独占状態は、少なくとも紀元前7世紀まで続くことになる。

フェニキア人はクレタ人に習い、交易の安全と契約の仲介によって、他国には手が出せない独占状態を作り上げることができた。そしてそれまでの主要輸出品目のレバノン杉以外にも、紫色の染料などの製造・販売を手掛けるなど、商人としても有能であった。ガラス工芸や土木技術などにも優れており、あまり知られていないが、紀元前10世紀にイスラエルの「ソロモン神殿」建築を受注・完成したのもフェニキア人である。

前述したBC9世紀（BC814年～）に開発した、カルタゴの街のインフラを整備するにあたり、所有する富の多寡（たか）によって拠出額が決められ、街の重要事項に関する発言権は、その拠出額によって差がつけられていた。

これらは今の株式会社などでも見られるものと同様の出資および決定権の制度であるが、すでに紀元前9世紀にその曙光が見えるのは、(何と言ってよいかわからないが)「凄いこと」である。

フェニキアの政治体制は、市民集会と長老会議の組み合わせである。『フェニキア人 ―古代海洋民族の謎―』の著者、ゲルハルト・ヘルム[3]は次のように述べている。

> 先頭に立って政治を行ったのは、元老院の貴族クラブであった。正確に言えば「百人委員長」で、その名にもかかわらず、104名の名士がその委員であった。数百名の議員を数える上院は、この委員会の用意した議案を数える上院は、この委員会の用意した議案を討議し、否決あるいは承認することができるだけであった。しかし貴族会議とスーフェテスの意見が食い違う場面には、国民会議が決定権を持った。
>
> これを要するに、直接民主主義の要素をまじえた、ほとんどの欠陥のない議会制度であったように思われる。（傍点は筆者）

これはギリシアのクレイステネス（紀元前6世紀後半～紀元前5世紀前半）や、ペリクレス（BC495ごろ～BC429）の政治改革よりも先んじているため、ギリシア人の「民主政治」ですら完全なオリジナルの発明でない可能性が高い。宇野重規氏の『民主主義とは何か』にも述べられているが、ギリシアの民主制には先行する事例があったはずであり[4]、少なくともその一つはカルタゴだったのだろう。

スピリッツ・オブ・キャピタリズム

のちの社会で、ドイツの哲学者マックス・ウェーバーは、アメリカのニューイングランド諸州の経済発展の根底には「富の蓄積と投資の教義的な肯定」が不可欠であったことを論証する。この資本主義の精神をウェーバーは、「プロテスタンティズムの倫理[5]」と呼んでいる。

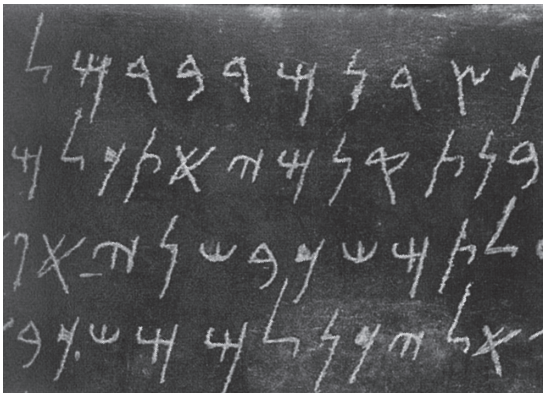
3）ゲルハルト・ヘルム『フェニキア人 ―古代海洋民族の謎―』河出書房新社、1976.
4）宇野重規『民主主義とは何か』講談社現代新書、2021.
5）マックス・ウェーバー『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、1976.

フェニキア人による拠出額の多寡による決定権への影響力は、資本主義システムの芽生えとも呼んでしかるべきものだが、驚くべきことにカルタゴでは、このプロテスタンティズムの倫理に似た「資本主義の精神」―（異なる宗教と神であるが）勤勉に働くことに宗教的意義を持ち、倹約で質素な生活を送る教義―まで発明されていたらしい。

ゲルハルト・ヘルムの文章を再度引用しよう。

> 誰でも自分の物質的境遇から、神に分かち与えられた愛の度合いを推し測ることができるというカルヴァンの主張は、中世ヨーロッパが近代へ飛び込むのに使ったロケットの動力になった。「資本主義のプロテスタント的倫理」は確立され、富と富を得ようとする努力は神学的に是認され、かの「見えざる手」の即位に至るまでの道はもう遠くはなくなった。（中略）
>
> しかしこの教説がえりにえって商人民族 ―経済的繁栄こそ神の恩寵の最高の表現であることをすでにいつも確信していた民族― の子孫によって立てられたのは偶然だろうか？われわれの資本主義的な考えかたは、ポエニ人のそれとあまり違ってはいない。
>
> （傍点は筆者）

ここでヘルムが「ポエニ人」と呼んでいる人々は、基本的にフェニキア人と考えてよい。残念なことに、ギリシアの歴史を残したホメロスのような存在がなかった（もしくはあったが残らなかった）せいで、フェニキア人の成し遂げた功績は歴史的にあまり重要視されないことが多いが、フェニキア人の影響は古代ギリシアに勝るとも劣らないものだ。歴史上の影響力で言えば、クレイステネスやペリクレスの民主政治に先んじること（少なくとも）300年、ドイツで有名な「資本主義の精神」からは2000年以上先んじでいたことになる。筆者は日本の商人の「信用第一」、「損して得取れ」といった商人道の精神の源は、フェニキア人にあるとすら考えているが、その話は稿を改めて紹介するだろう。



ゲルハルト・ヘルム、1976
フェニキア文字

図表⑥

『ビジュアル版世界の歴史大年表』定延由紀他訳、創元社、2020.

フェニキア文字

わざとここまで言及しなかったが、「フェニキア人の発明品」として、もうひとつ知られているものがある。それは22の子音から成る「アルファベット」で、通常「フェニキア文字」と呼ばれている。

文字の系統樹については後段部で説明するが、考えてみれば海の交易 ―特に国際的に複雑になりつつある広範囲の交易― において、「共通の文字」が不可欠であるのはクレタ人の例でも見たとおり。特に品数が増えた結果として、今まで聞いたこともない物品が貿易対象となる可能性は高い。たとえば「キリンの毛皮」とか、「アクキ貝の装飾品」などと言われても、そんな物を表す絵文字、もしくはそれに類する文字や共通認識は存在しないのである。ところが表音文字（アルファベット）なら、その元々の発音に近いモノを示すことが可能であり、当時の商取引メモ（契約）も品物を表すために、発音らしきものをメモとして書き記したのだろう。こうして地中海交易を通して、フェニキア文字は共通の言語・文字として広まっていったのである。

公平を期すために付け加えると、表音文字（アルファベット）を最初に作ったのはフェニキア人ではない。次の項目でも解説するが、表意文字にしか見えないエジプトのヒエログリフも、早くから音を表わす表音文字が含まれているし、それを応用したシナイ半島の文字（「原シナイ文字」：BC18～16）は発音用アルファベットであり、フェニキアのアルファベットより数百年古いものである。

それでもなおフェニキア文字がアルファベットの先祖である（しかも始祖である）とされることが多いのは、それだけフェニキア文字が洗練され、使いやすかったことと、真の国際マーケットをスタートさせたのが彼らだったからである可能性が高い。つまりフェニキア人は、本当の意味で国際人だったのであろう。

表音文字の発達

フェニキア人がアルファベットの発明者でなかったとしても、すでに存在していた使い勝手の悪い文字群を改革し、書きやすく商人たちにも使えるものに変えたのは間違いない。のちのアルファベット ―たとえばヘブライ文字やローマ字― は、ほぼすべてがフェニキア文字の子孫であり、それはフェニキア人が、使い勝手のよい使える文字として進化させたからに他ならない。

それまでのアルファベットは、専門の書記などが書き記すのが常であったがゆえに、少々画数が多かろうと、文字数が何百字あろうと、とりあえず記録できる状態だった。それを商人全般が使える共通文字に変えた功績は、多大なものがあったと考えられる。ただし運も味方したのは確かである。

原シナイ文字

ヒエログリフを除き、最初のアルファベットと呼んでよい表音文字群は、おそらく「原シナイ文字」であろう。わざわざ「原」をつけるのは、のちに出現したシナイ文字と区別するためである。

原シナイ文字は、子音を中心に30文字ある。ただし子音とも母音ともとれるものが含まれているため、厳密な区別はしないでおく。およそBC18～16世紀頃から使われたとされるが、今後の発掘状況次第では、さらに時代を遡る可能性は残る。

地図（図表④参照のこと）を見てもらうと明らかなように、シナイ半島は、エジプトとカナン地方を結ぶ要の位置にある。陸路だとシナイ半島を通らずに、エジプトと中東を行き来することは、かなり無理がある。つまりエジプトの商品と中東の商品の交易を扱う商人にとって、シナイ半島は中心的な場所にあることになる。当然ながら取引のメモ（契約書）は双方に理解しうる文字でなくてはならず、以前に述べた理由で、「表音文字と数詞のセット」が必要であったと考えられる。

実を言えば、原シナイ文字はヒエログリフの簡略体として知られる「ヒエラティック文字」を基本モチーフとして作り直したものにすぎない。次表を見ると、その類似性は明らかとなる。

ヒエラティックは、主としてエジプトの神官たちに使われた文字で、基本的に神殿の壁や柱を飾るヒエログリフと同じ文字であるが、少し（かなり）簡略化されている。ちょうど漢字の草書体のように書き易くくずした字体が、ヒエラティックと考えるとよい。

ウガリト文字

紀元前17世紀の終わり頃より紀元前13世紀半ば頃にかけて、北シリアの地中海沿岸あたりに栄えたのが、「ウガリト王国」である。前述の地図にも載っているので見てほしいのだが、ここも交易の要所である。ここで使用され始めた文字が「ウガリト文字」であるが、この文字は「楔形文字のようなアルファベット」であって、それまでのバビロニアやアッシリ

図表⑦

（松本弥、2019を参考に谷岡が作り直した）

アの楔形文字とは、性格を異にしている。

ここが交通の要所である理由は、海に近く、大きな河にも接していることによる。むかしの隊商（キャラバン）は、飲み水が必要であったことから、川添いに作られた道を進むのが常であった。地図上の右端より東の地域は、砂漠だったり山岳だったりして、とても人やらくだが通れるところではなかったのである。逆に言えば、アナトリアやメソポタミアの商品は、このあたりを通らないと市場に出せないということだ。

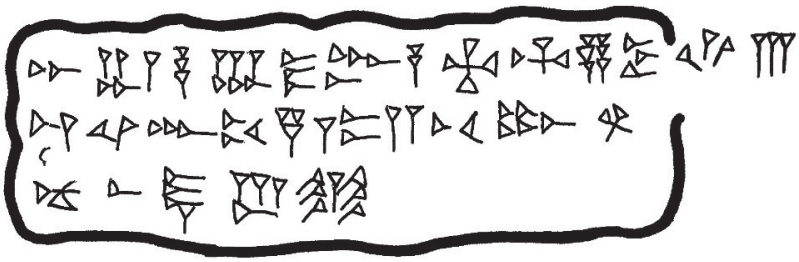
このウガリト文字は、おそらく原シナイ文字を参考にしている。と言うのも、時代的にフェニキアやカナンの文字より古く、加えて「子音を中心として30字ある」からである。カナン人たちの発音は、子音22字で充分だったため、カナン地方の端にあるウガリト王国の人々が他のカナン文字を参考にしたとすれば、フェニキア文字のように22字かその前後の数値になったはず。30字という原シナイ文字と同じ字数は、おそらく偶然ではないだろう。

シナイ半島もウガリトも、ここを通らない限り交易に不便と言ってよい場所にあり、それぞれで30字のアルファベットが発達したのは、「それが商売上必要だったから」というのが、筆者の仮説の一部分をなす。つまり「アルファベットの発達は、交易の要所では必然的に起こる」ものだと考えているのである。むろん何度も言及したように、両国で理解可能な契約が必要になるからである。

フェニキア文字

簡単な（日常生活上の）通訳のできる人は（特にむかしむかしは）多くはない。とりあえず交流のある複数の社会では通訳が必要であり、そのような人々も実際に存在した。

通訳ができる人間として考えられるのは、まずもって商人であるが、他にも伝道師（宗教）、探検家・旅行家、そして当時には少なくとも存在していた、奴隷のような強制的に移住させられた人々のうちいくばくかも、両国の言葉を理解できた人々だっただろう。ただし話が通じるからと言って、書けるとは限らない点には注意する必要がある。話せることと、書けることは同じではない。後者は前者より難しいという事実は、これからの話に重要なポイントとなるので覚えておいてもらいたい。



ウガリット＝アルファベットが書かれていた粘土板（ラス＝シャムラ出土）
（世界の文字の図典、2009、P.58より作成）

図表⑧

『世界の文字の図典　普及版　世界の文字研究会編』吉川弘文館　2009.

われわれ日本人は、字を書くことがほぼあたりまえの世界に住んでいるがゆえに、字を書ける人に驚くことは少ない。しかしそれは教育システムが発達している以外に、「ひらがな」という便利な「発音記号からスタートできる文字システムが存在するから」、という別の理由もある。これが漢字（表意文字）しかなく、いきなり何百字もの文字（しかも画数が多い）を覚えなくては本も読めない中国だと、段階的な学習がかなり困難であることはお判りいただけるだろう。しかも中国語の文章は、語尾変化や時制、さらに明確な文法すら存在しないため、中国語文献は話し言葉をそのまま写し取ることは（基本的に）ないとすら言える。たとえば漢字研究の岡田英弘[6)]（宮脇淳子編、2021）は次のように述べている。

> そういうわけで、シナでは紀元前三世紀から、文字と言葉は別物であり、漢文以外に漢語などというものは存在しなかった。話し言葉をそのまま写して文字にするという観念は、十九世紀末、日清戦争のあとで清国留学生が日本で発見したもので、これがきっかけになって1918年、中華民国の教育部が中音字母（ちゅういんじぼ）という、カタカナをまねた表音文字を公布したのが、口で話し耳で聴いてわかる中国というものの開発の第一歩になった。
>
> （前掲書、P.55-56より）

少し話がそれたが、絵文字などの表意文字の文章とフェニキア文字の関係は、ちょうど漢文とひらがなの関係に似ていることを言いたかったのだ。漢文を読んだり書いたりできなくても、ひらがななならなんとかわかる。あまり教育を受ける機会に恵まれなかった人々にとっても、ひらがなは便利なコミュニケーション・トゥールとして、日常生活や商売に活用できただろう。このようにフェニキア文字は、地中海を囲むすべての国々で（権威をふりかざすだけでなく、高くつく）書記を不要とし、契約というものを広範囲に普及させることができた。ついでに経費まで安くなったのである。

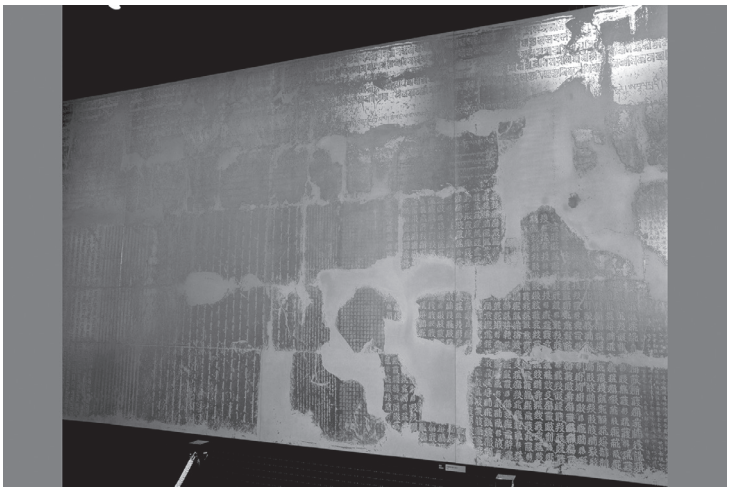
フェニキア文字が普及する以前は、お互いの協定書や宣言など、皆に知らしめる必要があるものに、両国の文字を併記することがよくあった。そうしないと両国民に公開しても理解可能なものにはなりえなかったからである。たとえば1799年にエジプトのロゼッタ近郊で発見された「ロゼッタ・ストーン」には、ヒエラティック文字、そしてそれをより筆記体としたデモティック文字、ギリシア文字という3つの文字で祝賀用文章が併記されていた。それがヒエログリフ（ヒエラティック）やデモティック文字（大衆用筆記体）の解読への決め手になった話は有名だが、他にもエジプトとヒッタイトの戦争（カデシュの戦、BC1273）終決文書（石刻）は最古の平和条約として国連にも展示（レプリカ）されている。

アジアでも同様で、難攻不落と言われた「居庸関（きょようかん）」の建物内部には、複数の言語で書かれた文章がある。中国において関所とはいわば国境であり、多民族が交易をする拠点としての機能も持っていたからである。

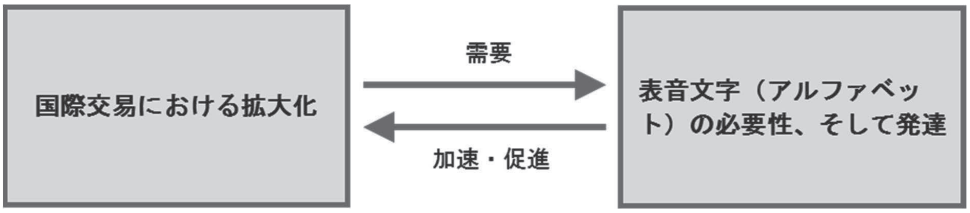
ここまでの論旨をまとめるなら、次のようなことが言える。「まず国際的交易の広がりが、簡単に使える表音文字セットを必要とした（そしてそのとおり発展した）」、続いてこのよう

6）岡田英弘『漢字とは何か ―日本とモンゴルから見る―』藤原書房、2021.

にも結論付けられよう。すなわち「簡単に使える表音文字セットは、広範囲の交易を促進した」と。図示すると図表⑩のようになる。



図表⑨　居庸関壁画（レプリカ）
国立民族学博物館所蔵

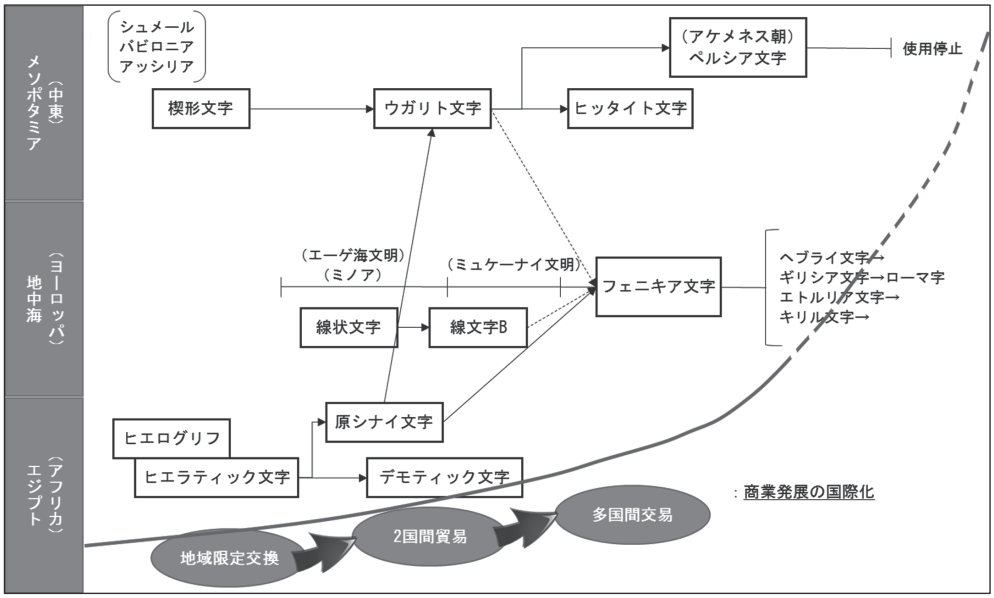


図表⑩

表音文字の系統

表音文字 ―厳密には同じものではないが、文字数が限られた「アルファベット」と考えてよい― と数詞の体系が国際交易の幅を広げ、中身を濃くしたのは間違いないが、本稿の仮説は因果律が逆方向にも進むことを暗示する。すなわち「商売上の必要性により、より使いやすいアルファベットが工夫される必要があった」という方向性である。

ヒエログリフ（ヒエラティック）の発音用記号をスタートとし、原シナイ文字やウガリト文字が作られたのは、交易の拠点であったがゆえであり、カナン地方のいくつかの文字を経て、最終的に海のハブとして活躍したフェニキア人によるフェニキア文字が、世界（と言っ



図表⑪

ても、ヨーロッパ、中東、アフリカの一部まで）の交易システムを確立したのである。

広まったフェニキア文字は、各地でローカルなアルファベットや字のデザインに変化し、今我々が見るほとんどのアルファベットは、ここから始まっているようだ。ただし漢字圏におけるひらがなやその他の漢字圏で使用された送り仮名、あるいはアジア独自の文字（たとえばハングル文字）など、そのルーツから外れているケースがある。

図にまとめると、地中海を囲む比較的早く交易を中心とする文明が発展した地域（一部）の、文字の系統樹は次のようになる。「商業発展の国際化」傾向も同時に示してある。ただし実際に存在したこの10倍くらいの言語や文字については、話をややこしくするだけなので省略した。

もともとの楔形文字はアルファベットではなかったが、のちにその種の機能が加わっていき、ウガリト文字や（アケメネス朝）ペルシアの文字では、すでに完全なアルファベットとなった。だたし今では使われない文字となってしまったのは残念なことである。

漢字圏でもアルファベットのような表音文字を作る努力がなされてきたが、本土中国ではなかなか普及できなかった（一応今でもあるにはある）。より成功したのが、日本のひらがな（カタカナ）や韓国、ベトナムなどの周辺国だったのは、皮肉な話である。中国本土はそれでもあれだけの経済発展（商業上の成功）を収めることができた。それはそれでたいしたものであるが、本当はもっと発展できていた可能性もある。その話を始めると、また同じくらいの文量が必要となるため、その論考は別の機会とし、本稿はこのへんで筆を置くことにしよう。

参考文献

・マックス・ウェーバー著、大塚久雄訳、『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、1976.

・宇野重規著、『民主主義とは何か』、講談社現代新書、2021.

・岡田英弘著、宮脇淳子編・序、『漢字とは何か―日本とモンゴルから見る―』、藤原書房、2021.

・シリル・P・クタンセ著、大塚宏子訳、樺山紘一日本語版監修、『海から見た世界史―海洋国家の地政学―』、原書房、2016.

・エリック・H・クライン著、安原和見訳、『B.C.1177古代グローバル文明の崩壊』、筑摩書房、2018.

・『ビジュアル版世界の歴史大年表』、定延由紀・李聖美・中村佐千江・伊藤理子訳、創元社、2020.

・『世界の文字の図典　普及版　世界の文字研究会編版』、吉川弘文館、2009.

・フィリップ・パーカー編著、蔵持不三也・島内博愛訳、『世界の交易ルート大図鑑―陸・海路を渡った人・物・文化の歴史―』、柊風舎、2015.

・テルモ・ビエバニ／バレリー・ゼトゥン著、エラリー・ジャンクリストフ・篠原範子・竹花秀春訳、小野林太郎日本語版監修、『人類史マップ』、日本ナショナルジオグラフィック社、2021.

・ゲルハルト・ヘルム著、関楠生訳、『フェニキア人―古代海洋民族の謎―』、河出書房新社、1976.

・PRIYA HEMENWAY, “THE SECRET CODE”, EVERGREEN, 2008.